

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第110号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)7月16日 金曜日

2021年(令和3年)7月16日 金曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、67歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。乗り越えて奮闘する。4作目は「古代史から文化研究。埋もれた東北の本を変えることを標榜。」



大活躍の大谷選手はアテルイ・モレと同郷！

複数の東北出身者が野球の頂点MLBで活躍中

【復興五輪】は消えたが東北の世界的野球選手がいる

だまされた「復興五輪」
この新聞の百十号の発行後すぐに東京オリンピックが開催される予定である。招致当初は「復興五輪」と名付け、東日本大震災からの復興をアピールする五



オールスターゲームでの大谷選手の投球フォーム

輪にすると関係者は言っていたが、やはりというべきか、完全に裏切られた。招致のための旗印に使われただけだったのだ。ほんとにこんなことがあっていいのだろうかかと怒りを隠せない。

大リーグで活躍する東北出身者
気を取り直して、スポーツ全体を見渡せば、いまは大リーグで活躍する日本人もいるし、ゴルフの世界メジャー大会で活躍する

日本人もいる。そこで大活躍する日本人選手のなかに東北出身者がたくさんいて、裏切られたオリンピックより筆者はそちらの方に心が向く。まずは何と云っても、岩手県出身の「大谷翔平選手」、同じく岩手県出身で高校の先輩の「菊池雄星投手」、高校が宮城県だった「ダルビッシュ投手」。彼らの活躍はほんとうにすごい。

大谷選手は投手兼バッターの「二刀流」である。野球の神様のベーブ・ルースの再来とも言われている。菊池投手もダルビッシュ投手もすごいが、やはり「二刀流」にはかなわない。それはさておき、三人の東北出身者が野球の頂点のMLBのオールスターゲームに招待されたことを大々的にアピールしておきたい。

大谷翔平選手の故郷
大谷選手の出身県の岩手県は筆者にとっても何かと縁のある県である。さらに調べたら、奥州市水沢というではないか。聞き覚えのある地名と思ったら、何と三年半ほど前に、そこを取材で訪ねていることを思い出した。

アテルイとモレと同郷
そこは、古代東北の英雄・アテルイの出身地であり、かつ、アテルイとモレが大和朝廷と戦った激戦の地でもある。

筆者は現にアテルイの生誕の地の碑を見つけ、さらにあちこち走り回って、モレの屋敷跡といわれる場所も突き止めた。なつかしいその二つの場所のすぐ近くが大谷翔平選手の生誕の地というの何か因縁があるような気がしてならない。

国内から一挙に世界へ
大谷翔平選手の「二刀流」は、専門性が高くなっているアメリカ野球でも、日本野球でも、これは通常ではありえない。それにあえて挑戦して成功して一躍有名になった。これは、アテルイとモレが、圧倒的な朝廷軍の軍事力に対抗して、わずかな兵のゲリラ戦で挑むという誰もが思いつかない戦術を採用して、序盤戦において朝廷軍を打ち負かした精神とどこか共通しているように思えるのは筆者だけではない。

アテルイとモレは残念ながら、東北エミシの独立を最終的には守れなかった。しかし大谷翔平選手は、たった一人で、アテルイ・モレの精神を引き継いで、大胆な手法で野球の最高峰を征服しようとしているのではないか、また国内から一挙に世界に飛び出して勝利を勝ち取ろうとしているのではないだろうかと秘かに考えている。機会があったら本人に尋ねてみたいものだ。

大谷翔平選手は、た

大谷翔平選手は、た

大谷翔平選手は、た



花巻東高校の先輩・菊池雄星投手と



トップバッターの大谷選手



東北地図一奥州市



奥州市詳細図



奥州市水沢神明町のアテルイ生誕の地碑

- * 大谷翔平選手:奥州市水沢姉体出身
- * アテルイ:奥州市水沢神明町生誕
- * モレ屋敷跡:奥州市前沢町生母



インタビューを受ける大谷選手(奥州市水沢姉体出身)



奥州市前沢町生母にあるモレ屋敷跡



先発投手としての大谷選手



投球に入る直前



ホームラン競争



打撃の直前

第83回

水産業再興のための料理レシピ紹介

今回も松本さんがお休みのため7月が旬の魚介類を紹介します！
7月は魚介類の種類も大変多く、全部取り上げるのはむずかしいので2種のみを！



カツオ：やはりたたきですね！厚く切ったカツオに、ニンニクとたっぷりのネギでガブリと！お酒が進みます



スルメイカ：刺身もいいですが、新鮮なスルメイカならぜひ「イカワタ」！考えただけで涎が出てきます

東京は再び居酒屋で酒類提供禁止となりました。日本酒好きへの仕打ちとしては、地獄の試練のようなものです。でも、居酒屋のみなさん、酒蔵の皆さんは比べものにならないくらい大変だと思います。居酒屋での飲酒が解禁されたら【1年半の空白】を埋めるほどにタラフクいただこうと思います。それまでは家飲みで辛抱します。早く美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたい！

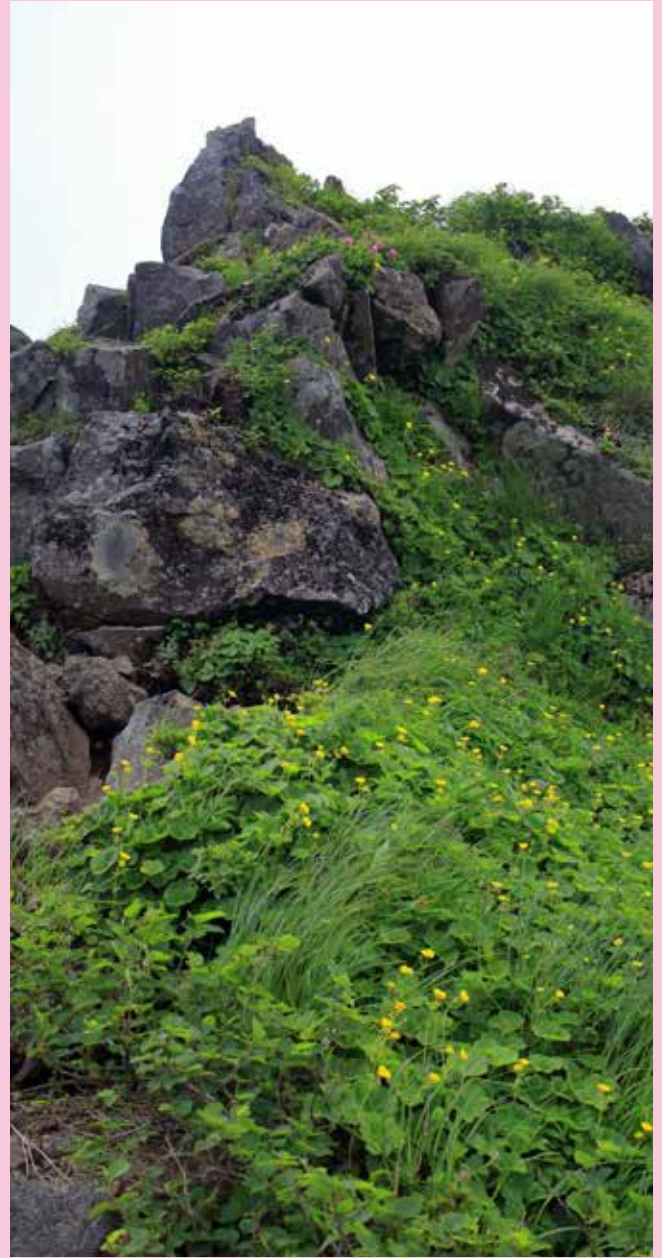




写真で
お伝えする
東北の風景

写真撮影
尾崎匠

7月の山
に行きたい！
（秋田
駒ヶ岳）



実は住みやすい 東北の諸都市

全国で一番「住みやすい」仙台

よく「仙台は住みやすい」と言われる。「住みやすい」の要因はいろいろと挙げられる。曰く、街の大きさが大きくすぎず小さすぎずちょうどよい、海も山もあり自然に恵まれている、東京まで新幹線で最短一時間半とアクセスがよい、暑すぎず寒すぎず雪も少なく過ごしやすい、などなど。

このうち、「暑すぎず寒すぎず」については、データでも明らかになっている。仙台は、年間の真夏日と真冬日の合計が全国の都道府県庁所在地の中で最も少ないのである。

よく気象関係のニュースで出てくる「平年」とは過去三〇年間の平均値のことである。さらに言えば、「平均値」とは言っても、例えば気温であれば三〇年間の平均気温を三〇で割る、といったものではない。

よく「仙台は住みやすい」と言われる。「住みやすい」の要因はいろいろと挙げられる。曰く、街の大きさが大きくすぎず小さすぎずちょうどよい、海も山もあり自然に恵まれている、東京まで新幹線で最短一時間半とアクセスがよい、暑すぎず寒すぎず雪も少なく過ごしやすい、などなど。

「住みやすさ」の根拠となるデータ

この新平年値のデータによれば、仙台の年間の真夏日の日は二二・〇日、真冬日の日は〇・八日、これを合わせると二三・八日となる。政令指定都市で見ると、仙台より北の札幌は、真夏日こそ仙台より少ない八・六日だが、その代わりに真夏日が四三・六日もあり、その合計は五二・二日となる。仙台より南の各都市は、お察しの通り、真夏日こそほとんどであるものの、代わりに真夏日が多く、横浜は四八・八日、名古屋は六九・七日、大阪は七四・九日、広島は六四・三日、福岡は六〇・四日、などとなっている。名古屋以西は何と二ヶ月以上もの間、真夏日が続くのだということが分かった。真夏日になると「暑すぎる」「死にそう」などという言葉が飛び出してしまう仙台市民からすると、二ヶ月以上もの間真夏日が続くという状況には、凡そ耐えられそうないがしがない。

この新平年値のデータによれば、仙台の年間の真夏日の日は二二・〇日、真冬日の日は〇・八日、これを合わせると二三・八日となる。政令指定都市で見ると、仙台より北の札幌は、真夏日こそ仙台より少ない八・六日だが、その代わりに真夏日が四三・六日もあり、その合計は五二・二日となる。仙台より南の各都市は、お察しの通り、真夏日こそほとんどであるものの、代わりに真夏日が多く、横浜は四八・八日、名古屋は六九・七日、大阪は七四・九日、広島は六四・三日、福岡は六〇・四日、などとなっている。名古屋以西は何と二ヶ月以上もの間、真夏日が続くのだということが分かった。真夏日になると「暑すぎる」「死にそう」などという言葉が飛び出してしまう仙台市民からすると、二ヶ月以上もの間真夏日が続くという状況には、凡そ耐えられそうないがしがない。

東北に関しては、山形が真夏日四一・三日、真冬日六・九日で合計四八・二日、福島が真夏日四七・一日、真冬日一・〇日で合計四八・一日である。どちらも内陸の都市だけあって真夏日が東北の他の都市に比べると多いが、それでもさらに真夏日の日数が多いところがある。全国の県庁所在地中では上位に位置している。

ちなみに、昨年までの旧平年値では、仙台の真夏日の合計は一七・九日、真冬日の合計は一・七日で、合計一九・六日と二〇日も切っていた。新平年値と比べると真夏日が増えて真冬日が減っているわけで、こうしたところからも気温が上昇傾向にあるということが見て取れる。

こうして見てみると、東北の各県庁所在地は、全国の並み居る都市と比べても気温の面ではかなり住みやすいということが分かる。東北に関してはこれまで

真夏日の合計が三〇日を超えている。それに続くのが青森で、真夏日が一四・七日、真夏日が一八・七日の合計三三・四日、その次が盛岡で、真夏日が二二・四日、真夏日が二二・四日の合計四四・八日である。真夏日と真冬日の合計が三〇日台なのは他には新潟の三六・七日と、水戸の三八・〇日のみで、残りの都市はすべて四〇日を超えている。

東北に関しては、山形が真夏日四一・三日、真冬日六・九日で合計四八・二日、福島が真夏日四七・一日、真冬日一・〇日で合計四八・一日である。どちらも内陸の都市だけあって真夏日が東北の他の都市に比べると多いが、それでもさらに真夏日の日数が多いところがある。全国の県庁所在地中では上位に位置している。

ちなみに、昨年までの旧平年値では、仙台の真夏日の合計は一七・九日、真冬日の合計は一・七日で、合計一九・六日と二〇日も切っていた。新平年値と比べると真夏日が増えて真冬日が減っているわけで、こうしたところからも気温が上昇傾向にあるということが見て取れる。

こうして見てみると、東北の各県庁所在地は、全国の並み居る都市と比べても気温の面ではかなり住みやすいということが分かる。東北に関してはこれまで

東北に関しては、山形が真夏日四一・三日、真冬日六・九日で合計四八・二日、福島が真夏日四七・一日、真冬日一・〇日で合計四八・一日である。どちらも内陸の都市だけあって真夏日が東北の他の都市に比べると多いが、それでもさらに真夏日の日数が多いところがある。全国の県庁所在地中では上位に位置している。

ちなみに、昨年までの旧平年値では、仙台の真夏日の合計は一七・九日、真冬日の合計は一・七日で、合計一九・六日と二〇日も切っていた。新平年値と比べると真夏日が増えて真冬日が減っているわけで、こうしたところからも気温が上昇傾向にあるということが見て取れる。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブローグ」
<http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

東北に関しては、山形が真夏日四一・三日、真冬日六・九日で合計四八・二日、福島が真夏日四七・一日、真冬日一・〇日で合計四八・一日である。どちらも内陸の都市だけあって真夏日が東北の他の都市に比べると多いが、それでもさらに真夏日の日数が多いところがある。全国の県庁所在地中では上位に位置している。

東北の中で一番住みやすい市町村は

さて、どうやら、「暑すぎず寒すぎず」の指標としての真夏日と真冬日の合計日数が少ないエリアは概ね東北周辺である、ということとは分かったが、より詳細に見てみるとどうであろうか。つまり、東北の県庁所

順位	県名	市町村名	地点	真夏日	真冬日	合計
1	福島県	いわき市	小名浜(オナハマ)	10.7	0.0	10.7
2	宮城県	石巻市	石巻(イシノマキ)	9.7	2.1	11.8
3	岩手県	下閉伊郡岩泉町	小本(オモト)	10.1	2.7	12.8
4	宮城県	名取市	名取(ナトリ)	14.1	0.6	14.7
5	岩手県	下閉伊郡山田町	山田(ヤマダ)	14.2	0.9	15.1
6	福島県	双葉郡広野町	広野(ヒロノ)	15.1	0.0	15.1
7	岩手県	大船渡市	大船渡(オオフナト)	12.6	2.7	15.3
8	岩手県	宮古市	宮古(ミヤコ)	13.9	1.6	15.5
9	宮城県	亶理郡亶理町	亶理(ワタリ)	16.4	0.7	17.1
10	青森県	下北郡大間町	大間(オオマ)	0.8	16.5	17.3
11	秋田県	山本郡八峰町	八森(ハチモリ)	8.3	9.0	17.3
12	山形県	酒田市	飛島(トビシマ)	14.3	3.2	17.5
13	秋田県	にかほ市	にかほ(ニカホ)	16.2	1.4	17.6
14	岩手県	久慈市	久慈(クジ)	11.9	5.8	17.7
15	岩手県	下閉伊郡普代村	普代(フダイ)	13.8	3.9	17.7
16	宮城県	気仙沼市	気仙沼(ケセンヌマ)	13.5	4.2	17.7
17	宮城県	本吉郡南三陸町	志津川(シヅガワ)	17.8	1.6	19.4
18	宮城県	塩釜市	塩釜(シオガマ)	15.9	4.2	20.1
19	青森県	西津軽郡深浦町	深浦(フカウラ)	5.7	14.5	20.2
20	岩手県	上閉伊郡大槌町	新町(シンチョウ)	18.0	2.3	20.3
21	岩手県	陸前高田市	陸前高田(リクゼンタカタ)	15.6	4.9	20.5
22	山形県	鶴岡市	鼠ヶ関(ネズガセキ)	19.7	1.0	20.7
23	福島県	相馬郡新地町	新地(シンチ)	20.4	0.7	21.1
24	宮城県	大崎市	鹿島台(カシマダイ)	18.4	3.0	21.4
25	青森県	下北郡東通村	小田野沢(オダノサワ)	3.9	17.6	21.5
26	秋田県	男鹿市	男鹿(オガ)	10.9	10.6	21.5
27	岩手県	九戸郡洋野町	種市(タネイチ)	9.0	12.7	21.7
28	宮城県	牡鹿郡女川町	女川(オナガワ)	18.8	2.9	21.7
29	岩手県	釜石市	釜石(カマイシ)	20.6	1.8	22.4
30	青森県	五所川原市	市浦(シウラ)	6.7	16.1	22.8
31	宮城県	東松島市	東松島(ヒガシマツシマ)	21.6	1.7	23.3
32	青森県	西津軽郡鰺ヶ沢町	鰺ヶ沢(アジガサワ)	8.7	14.7	23.4
33	山形県	酒田市	浜中(ハマナカ)	21.8	1.6	23.4
34	宮城県	仙台市宮城野区	仙台(センダイ)	23.0	0.8	23.8

※スペースの関係で表は仙台より上位の都市のみ掲載した

在り地以外の市町村の中には、ひよっとしたら仙台よりもさらに「住みやすい」ところがあるのではないだろうか、ということである。

中でも真夏日と真冬日を合わせた日数が一〇日台という地点は一七ヶ所もある。ものすごく暑い日とものすごく寒い日の合計がこれくらいだと、実際のところかなり過ごしやすいのではないかとと思われる。

東北の並み居る「住みやすい」街の中でもトップは福島県のいわき市小名浜である。真夏日がゼロで、かつ真夏日も一〇日ちょっとしかないという驚異的な数値である。「いわきは温暖で過ごしやすい」とはよく

聞か言葉である。冬に寒くないというだけなら同様の場所は日本全国に他にもたくさんあるだろう。しかし、「温暖」というのはただ単に冬が寒くないというだけにとどまらず、だからと言って夏もそんなに暑くならないということである。この数値から実感した次第である。

以下、石巻市、岩泉町の小本、名取市、山田町、と続くが、上位を占めるのはやはり海沿いの市町村である。内陸については東北の北の方であっても真夏日がかなり多かつたりすることがこの表からも分かる。真夏日と真冬日の合計の少な

さという点では、海沿いの街に分がありそうである。とは言え、繰り返しになるが、内陸の市町村であっても、山岳部を除けば、東北以外の県庁所在地と比較してはるかに真夏日と真冬日の合計は少ないところが多い。東北全体が概ね過ごしやすい気温帯の中にあるということがよく分かる。

真夏日と真冬日がトータルで少ないということは、冷暖房費が安く済むということでもある。これは一例ではあるが、今までは違った面から東北の「住みやすさ」などいいたるところを捉え直すこともまた意義のあることであると言えそうである。



祭りを終わって



早池峯神社参道



クリンソウと社



高清水からの雲海

シリーズ
遠野
の自然

「遠野
の小暑」

遠野 1000 景
より



モウセンゴケ



山中で出会った苔

七月初めは、二十四節気
でいえば「小暑(しょうし
よ)」であり、暑気に入り
梅雨のあけるころとある。
ところが、最近の日本は、
二十四節気の定義とはまっ
たく異なり、梅雨が明ける
どころか、全国いたるところ



雲海の端

るで毎日雷がとどろき、集
中豪雨で道路が冠水して道
路網が寸断されたり、がけ
崩れが発生したりしている。
これまでの季節の定義が、
今年に限って言えば、まっ
たく当てはまらないと天気

予報士も嘆いている。
そんななかで、春を過ぎ、
もうすぐ夏が訪れるのを予
感させる遠野の写真である。
天気予報士の嘆きをよそに
遠野の季節は順調に移り変
わっていく。



お不動様

もはや盛り上がる事はない？ 義経北紀行伝説の事

ちょうど今から四年前の二〇一七年六月、テレビの長寿番組の一つ『世界ふしぎ発見!』(TBS系)で、「日本史最大の謎 消えた義経を追え」なる回があったという事を後になつて知り、ネット上で視聴したという事があった。実は当番組は海外取材ではない国内企画における数少ないテーマとして、これよりかなり以前にも一度「義経北行」を取り上げており、こうした分野を大真面目に取材する番組が少なくなつた昨今、この手の話が好きな人にとつて、それが映像付きで見られるという貴重な機会でもあると思われる。以前の放送を憶えていた自分とし



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

ながら紹介してみたい。題して『義経北紀行伝説・第一巻・平泉篇』である。

まず本書を書店の棚で見つけた時に驚いたのは、この現在において義経北行テーマ一つでこれほど厚い立派な本を書いて出そうという人物が存在するのかという事であった。それは間違いなく嬉しさを伴うもので、一体どんな事が書かれ何なる展開が為されるものかと期待は否応なく膨らむばかりである。しかもこれで何と未だ「第一巻」とは相当の野心が伺えようというものだ。

著者は山崎純醒。岩手県出身・在住のフリーライターで二〇〇九年に設立した義経伝説研究団体「義経夢の会」会長も務めるとい歴史研究者である。日本唯一の専門団体会長という事もあり、本書に投入されたエネルギーたるや尋常のものではないだろうが、まず一読して思うのは、「これは『良くも悪くも』間違いなく東北人が書いた本だ」という事である。同じ東北人でも例えば東北大学を出た人が書く(偏見?)ような理路整然とした本ではなく、同県人の高橋克彦に通じるような「なんでそっちに行くんだ」的な、つまり一歩間違えばトンデモ本になつてしまふかも知れぬ危なっかしさと、先の読めない一種の破壊力を予感させる作風で、故にたまらなく

面白い一冊なのである。まず普通考えられる義経研究の書と一線を画すのは、その歴史マニア振りである。

実はこの本のなかのなかのページ数、全編が源義経関連で埋められている訳ではない。無論、武家政権樹立を目論む兄・源頼朝に追われた悲劇の武将・義経を本軸に語りながら、まずは「ところで義経の飲んだ酒とは」と言つて古代から江戸期に渡る酒の歴史の話になり、更には「位牌はいつできたのか」「当時の死生観」「当時の食事(米や味噌)」「武士の教養・文盲率」、当時の北方交流の話から「DNAについて」、他にも馬の歴史や弓矢の強さ、行軍において騎馬武者一人の背後にどれだけの従者や世話役、あるいは代わりの馬が存在したかなど、まさに痒い所に手が届くような思いづく限りの広範囲の筆致振り、とにかく読んでいて興味深く、飽きる事がない。しかも、本書には「別冊」として、藤原・源・平各氏ほかあらゆる氏族の系図を始め、残酷な源氏の棟梁・頼朝の勘気に触れ肅清された御家人を網羅した一覧表などを掲載した付録本があるという(なんでそんなところまでという)力のある入り様なのである。

本書の最大の魅力は、義経本人に関する以上の、平泉の藤原泰衡に対する思い入れと考察の深さである。

実は本新聞に創刊から寄稿されている大友浩平氏が古くから続けられているブログにおいて、本書に先駆けて泰衡の遺した逃避行の謎について考察されており、本書の主張はそれに通ずるものがある。大友氏も言及されている「頼朝の元へ送られた泰衡の首は偽首であった」という仮説は本書の白眉として強く主張されており、本書が「泰衡生存は義経生存と密接に関わっている」事を示した初めての書であるという自負心を、著者は隠さないのである。

本書における泰衡生存の根拠は次の通りである。一・泰衡を裏切つたとされる出羽・比内の河田次郎だが、彼が多くの家臣らに守られていたはずの泰衡を襲うという事はリスクが甚大であり、現実的ではない事。二・泰衡の首級の損傷がひどく、執拗に切り刻んだような傷で、これも当時の状況を考えれば不自然な事。三・泰衡の首は頼朝の元まで三日かけて届けられ、その場で血を洗われたという。通常、首級は死後直ちに洗い清められ化粧されてから運ばれる為、これも不自然である事。

他にも藤原四代の頭骨調査によれば、泰衡の顔の高さが先代までに比べ著しく低くなつている(縄文人的先祖返りしている?)事から血の繋がりのない別人の頭骨ではないかとも主張しているのだが、これにつ

いては顔の高さが必ずしも遺伝するとは限らない為、論拠に乏しいと感じる。とは言え、特に一、二については私自身常々抱いていた疑問ではあり、三についてはもなるほどと思わせられた。別冊の付録本にもあるように、東北にとつての史上最大の侵略者である頼朝への「恨み節」とも取れる徹底的な批判的姿勢も、本書が「間違いなく東北人が書いた本」と思わせる箇所である。無論本書が広い読者層に受け入れられるには敵味方問わぬ公平な視点が必要だが、頼朝の義経や泰衡に対する理不尽なまでの処断にはその後数百年に渡るであろう、異常なまでの冷酷さという歴史の始まりも見ろ思いがするのである。

一方で、不必要なところでツツコミどころも多い。泰衡を追つて比内まで来た妻が、夫の死を知つて自書した地に立てられた西木戸神社が、阿津賀志山の戦で死んだ国衡とその妻を祀るなど明らかに間違つた記述がある(そのような伝承があるのだろうか?今のところ確認不能である)。他、国衡の母はアイヌの娘アサメである事はよく知られているとか、中大兄皇子が日高見国侵略軍を十三湊に送つたが現地の水軍に返り討ちに遭つたとか、一体どこかの文献から引つ張り出した話なのか不明な記述が少な

くなく、おそらく何らかの記録はあつて全くの虚構ではないと思うし、個人的には楽しく好きなのだが、正直いささか心配にもなつてしまった。折角ここまで力を入れた本書が諸々の点から不信感を持たれ、評価されないと思えばあまりに勿体ないと思うのである。

実際のところ、本書はインターネット上でもほとんどレビュー・書評がなく、あまり注目すらされてこなかった様が見取れる。「やっぱり所詮、東北人が書いた本だ」などと思われては当然不意だろうし、一般的に偽書と目されていたり、事実が確認されていなかったりする文献に接するには一定の注意が必要だとつくづく感じるのである。

そもそも、「義経北行」を今どき大真面目に一冊書くとどうなる事か、一大奇書と一笑に伏される覚悟を持たねば挑めない「奇行」なのかも知れないが、ならばこれからの世代の東北人は、「もうこんなバカな事」と言つて義経伝説を追い、語り継ぐ事をやめていくのだろうか?それもまた、限りなく寂しい話だな、と思わずにはいられないのである。

今一度、義経北行伝説の意義について考えてみたい。義経は生きていた、という話と必ずと言っていいほどセットで出るのが「判官鼠貞」という言葉である。

弱者や不遇な者に肩入れするという意味で、日本人なかんずくそのような立場に置かれる場合が歴史上多かった東北人に強いとされがちな性質であると思う。ただ気になるのが、辞書上によく見られる「客観的な視点を欠いた同情」「あえて理非曲直を正さぬ哀惜の心情」という表現である。つまりこれは「論理的に考えると明らかにおかしいのに肩入れしてしまう」要するに判官鼠貞してしまう東北人は感情まかせで馬鹿なんだな、と言われているも同然ではないだろうか?もしそう思わない為に、東北人が将来義経北行伝説を忘れ去ろうとするならば、私たちは今こそ明確に「判官鼠貞」を否定しなければならぬのではないかと。

義経北行伝説がその言われ始めがどうであれ、現代に至るまで語り続けられてきたのには、単なる同情や妄想だけでは説明がつかないものがある。「秀衡死後一年半の間、義経は奥州で何をしていたのか?」「泰衡は蝦夷島へ渡ろうとしていたのに、何故海岸側

ではなく内陸に向かい、何日も滞在していたのか?」この二点を代表とする義経の死と平泉の滅亡に纏わる謎・矛盾は数多く、それらの疑問が未だ解消されていないからこそ、義経北行伝説は尚もリアリティを保ち続け、語り継がれているのではないだろうか。むしろ「論理的に考えると明らかにおかしい」のは正史を無闇に信じ込む側ではないか、という問いかけこそ、蝦夷たる者の弛まぬ本懐というべきかも知れない。

今回、あらためて調査したところ、山崎純醒氏が現在も本書第二巻を精力的に執筆中と判明、最終的には全四巻で完結の予定との事である。歴史研究の進展に伴ない、東北との関係の深さとその風土の素晴らしさの再発見によつて輝き続ける英雄・源義経。今日も一人の東北人の途方もないビジョンが、時を越えて郷土の真実への扉を叩く。義経北紀行伝説、その未来の盛り上がり

に期待したい。



『義経北紀行伝説 第一巻 平泉篇』 批評社 2016年



岩手県大槌町・向川原虎舞

シリーズ【東北の郷土芸能】第3回 【虎舞】について 航海安全と火伏を託す郷土芸能

筆者が最初に虎舞に出会ったのは、東日本大震災後のことだった。それまでは虎舞のことはなにひとつ知らなかった。

津波被災地で被害を受けた郷土芸能復興支援に関する東京都内の催しで、岩手県大槌町の「向川原虎舞風虎会」の会員だった岩間美和さんと名刺交換させていただいたのが虎舞との最初のきっかけである。岩間氏は、虎舞保存活動をするとともに、地元住民が立ち上げた「おらが大槌復興食堂」の店長さんとしても全国的に有名になっていた。

その後、現地の岩手県大槌町に取材に出かけ、虎舞を見せていただいたのが虎舞との最初の出会いである。

三陸沿岸は甚大な津波被害のあった地域で、なかでも大槌町の被害は甚大で、津波で破壊され、多数の被害者を出した大槌町役場は多くの人の記憶に残っていることと思う。

その他にも被害者ばかりの数に上った。岩間さんが所属する虎舞保存会の関係者にも多数の犠牲者が出ていた。また、山車や太鼓、衣装などの用具はもちろん、練習場や保管庫なども津波に流されて、虎舞復活など到底無理と思っていたようだ。

しかし、そんな状況の中でも、仲間とともに、地域の皆を励まそうと虎舞復活に挑戦していった。

全国的有志やNPOなどの力も借りながら虎舞は震災のあったその年から動きはじめ、地域の人の心を復興へ向けてさらに強く結び付ける役割を果たしてきた。

そのような、大震災を潜り抜けてきた虎舞であるが、大槌町のお祭り目当てにしたりするとき、この「虎舞」の舞の迫力と、独特の囃子に圧倒された。そして、よりも踊り手のみなさんのエネルギーに圧倒された。未曾有の大震災を乗り越えつつ、圧倒的な迫力でみなぎる生命力を筆者に見せてくれたのだ。

それ以来、虎舞という郷土芸能は大好きな郷土芸能となった。

新型コロナウイルス禍でなかなか現地に赴くことがむずかしいが、なるべく早く虎舞に会いに行きたい。

① **【虎舞】**は、東北では主に二つの別々の祈りを託す郷土芸能。ひとつは「航海の安全祈願」。昔から、沿岸地方の船乗りは「板子一枚、下は地獄」と言われ、漁師の家族にとって無事に寄帰港することが何よりの祈願で、「虎は一日にして千里行って、千里帰る」ということわざから、無事に帰る事を念じ、虎の習性に託して踊った虎舞が沿岸漁民の間に広がっていったと考えられている。もうひとつが「火伏祈願」。宮城県加美町の「初午まつり火伏せの虎舞」では、屋根の上に虎舞が並んで火伏の祈禱舞を演じる。650年前、春先の強風により大火の多かった中新田地区で、易の文献にある「雲は龍に従い、風は虎に従う」の故事にならい、虎の威を借りて風をしずめ、火伏を祈願したのが起源と言われ、毎年、春に開催される「初午まつり」で見ることができる。

② **踊りの形・様式**：獅子舞の一種で、ふたりの男性が虎模様の胴膜を身にまとい、虎の頭を操りその動きを模して舞う伝統芸能。笛や太鼓の威勢の良い独特の囃子も特徴のひとつ。虎舞の後に「手踊り」と呼ばれる虎を身に着けずに数人が素手で踊ることもある。

③ **分布**：全国にたくさんの虎舞と呼ばれる郷土芸能があり、伝承地によってその信仰や発祥、舞の形までさまざま。青森県八戸市、岩手県釜石市・大槌町・山田町などの三陸沿岸部、宮城県加美町、熊本県御船町、宮城県気仙沼市、神奈川県横須賀市、山梨県北杜市、静岡県南伊豆町、香川県東かがわ市、愛媛県松山市、鹿児島県いちき串木野市などに伝えられている。

④ **三陸沿岸に伝わる虎舞の主な演目**：

■「遊び虎」(「矢車」)・・・春の日差しを浴び無心に遊び戯れる虎の様子をあらわす。この時の太鼓の撥さばきが、5月の鯉のぼりの先端に取り付けられた矢車が風にくるくる回る姿に似ている事から「矢車」とも呼ばれている。踊り子が数人、扇子を持って共に踊ることもある。

■はね虎・・・「国性爺合戦」の和藤内の虎退治を題材に、追い込まれた虎が手負いとなって荒れ狂い、和藤内が一人でこの虎を仕止めるという場面を表現したもの。虎舞の中で最も勇壮闊達な踊りで、冒頭の「虎はどこだ～」の掛け声はこの演目で聞くことができる。

■笹喰み・・・繁殖期にある虎が、盛んに獲物を求めて焦燥し、気性が荒くなり笹に噛みつく様子。獵師が虎狩りするのはこの頃という伝説によるもので、笹竹をくわえて踊る姿は虎の習性をよく表している。虎は笹を食べているのではなく笹で歯を磨いているところ。

⑤ **主なイベント**：釜石市で行われる「全国虎舞フェスティバル」などでも見ることができる。10月中旬に3日間行われる「釜石まつり」では、船の上で虎舞が舞う曳舟が見られる。